

学校図書館活用教育「学び方指導体系表」（第7版・案）作成にあたって

令和7年4月

松江市学校図書館支援センター

1 「学び方指導体系表」作成について

令和2年度から実施された現行学習指導要領では、総則において「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくこと」の必要性や、「我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進する」ことが求められています。

また、「学校図書館（略）の利活用」では「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童（生徒）の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童（生徒）の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。」として、「これからの学校図書館には、読書活動の推進のために利活用されることに加え、調べ学習や新聞を活用した学習など、各教科等の様々な授業で活用されることにより、学校における言語活動や探究活動の場となり、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に資する役割」が一層期待されています。

こうした「生きる力」をはぐくむためには、児童生徒が「課題の設定、情報の選択・収集、情報の記録・整理・分析、情報をまとめ伝え合う」という一連の学び方（情報リテラシー）を身に付けていくことが必要と考えます。

2 「学び方指導体系表」（第7版）改訂について

令和7年度に使用する中学校教科書が採択されたことを受け、このたび「学び方指導体系表」の見直しを行いました。

授業実践の活性化を願い、授業者と司書教諭（学校図書館担当教員）、学校司書とが共通理解を図り、各教科等において情報リテラシーに関する学び方の指導を行う際のよりどころとなることを目指し改訂を行いました。

記載した指導事項等は、学習指導要領及び松江市で使用する教科書に即しています。教科は国語科を中心に、社会科、理科、生活科、技術・家庭科等の教科書に記載されている言葉を使用しています。

3 「学び方指導体系表」の見方

① 「学び方指導体系表」の形式について

表の横軸は、児童生徒の発達の段階に即して、小中一貫教育の「4・3・2」の教育区分とし、さらに学年に区分しています。

表の縦軸は、上段に【☆ 知る】「図書館の利用」を設け、以下に探究の学習過程に即して「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」、「振り返り」を設け、さらに具体的な学習内容に合わせた項目を設けています。

② 指導事項について

指導事項等は、小学校の国語科の教科書で示されている初出の学年を記載しています。児童生徒や学校の実態にあわせ、必要に応じ示されている学年より早い学年で取り組むこともありえます。

中学校についても、中学校の教科書の初出の学年を記載しています。よって、小学校との重複があります。中学校では、小学校でどのような力をどのくらい身に付けてきたのかを把握し指導してください。

各指導事項の文末に記した数字は、国語教科書で当該指導事項が取り上げられた単元を示すページ数です。当該指導事項が、単元の流れの中で、どのような学習活動をとおして児童生徒に示されているのかという理解に役立ててください。

③ 指導事項の内容について

小中ともに国語科の教科書の指導事項等（「言葉の力」）を基本とした上で、小学校では生活科（「がくしゅうずかん」）、社会科（「学び方コーナー」）、理科（「わたしの自由研究」「理科の調べ方を身につけよう」）、中学校では地理・歴史（「技能をみがくコーナー」）、公民（「みんなでチャレンジコーナー」）、理科（「巻頭・巻末資料」「基礎操作」）、技術・家庭科、英語の内容を参考に記載しています。

「*思考ツール」の利用は、小学校低学年から記載しています。「思考ツール」は、思考を広げたり整理したり深めたりするツールで、教科書では、特に「課題の設定」「整理・分析」の学習過程において使用する場面が例示されています。教科書の例示を参考にし、各思考ツールのはたらきをふまえて、授業のねらいにあわせて活用してください。

【付 記】 「学年系統関連表」（中学校版）について

今回の「学び方指導体系表」の改訂にあたって、探究の過程ごとに当該学年で扱う指導事項を記載し、学年間の系統性が俯瞰できるように「学年系統関連表」（小学校版・中学校版）を作成しました。

なお各教科書で使用されている指導事項が多いために大まかな記載となっています。実際に教科書をご覧いただきながら、使用する教科書と「学び方指導体系表」をつなぐツールとして位置づけ、体系的な情報リテラシーの指導の一助として役立てていただければと願っています。

